

【平成 28 年度倫理学専攻講演会講演要旨】

## 哲学対話の可能性

寺田 俊郎

はじめに

現在さまざまな展開を見せている「哲学対話」が与えられたテーマであるが、主な聴衆は教育学科の学生のみなさんと聞いているので、哲学対話のなかでも、特に子どもとする哲学対話、学校でする哲学対話に重点を置いてお話ししたい。「哲学対話」という語はすっかり人口に膾炙しているが、一つの業界用語にすぎないものが内容もよく知られないままに独り歩きしている感も否めない。以下で「哲学対話」という場合は、特定の流儀の対話技法ではなく、哲学的な対話活動一般を指すものと思っただきたい。

まず、私が哲学対話の活動に関わるようになった経緯も含めて、簡単に自己紹介したい。現在上智大学文学部哲学科の教員として、哲学の教育と研究に携わっている。主な研究分野は、イマヌエル・カントの実践哲学、近現代の倫理学、臨床哲学など。臨床哲学とは、一言で言うと、社会で生じるさまざまな問題の現場で哲学的に思考することである。この臨床哲学の活動の一環として、哲学的思考の場を創ることを試みてきたが、その手法が哲学対話であり、具体的には、市民のための哲学カフェ、ネオ・ソクラティック・ダイアログ、子どもとする哲学対話などである。二〇〇八年ごろ、子どもとする哲学対話を実践する人々が日本各地にいることを知り、その後まもなく、それらの実践をつないで、初等・中等教育における哲学教育を促進するための研究プロジェクトを開始した。横浜市立小学校、東京都立高等学校・中等教育学校などで哲学対話の授業を継続するほか、最近では、企業や若者の就労支援機関での哲学対話も試みている。

哲学対話の活動全般を通じて目的としていることは、対話する文化、熟慮する文化を日本社会に育てることだが、学校は特にそれを必要としていると思う。かつて学校教育を受けたものとして、中学・高等学校・大学の

教員として、そして哲学対話の実践者として学校教育に関わった経験から言えば、学校では意外に「考える」ことが少ない。日本の教育は「知力偏重」などと言われることがあるが、実は「知力軽視」、それどころか反知性主義・反理性主義の傾向すらあると思われるのである。

## 哲学対話のいろいろ

学校での哲学対話についてお話する前に、哲学対話のさまざまな形を紹介しておきたい。それらを総称して「哲学プラクティス (Philosophical Practice 哲学実践)」と言うことがある。

**哲学カフェ** 街の喫茶店などに一般市民が集まって、哲学対話を楽しむイベント。一九九二年にパリのカフェでマルク・ソーテという哲学研究者が始めたと言われる。それが瞬く間に世界に広がり、日本では二〇〇〇年ごろから徐々に広まった。現在日本全国で百数十あるという報告がある。

**職業人の哲学対話** 医療従事者や企業人（ビジネス・パーソン）のための哲学対話、若者の就労支援機関での哲学対話などがある。医療機関の研修や医療関係の学会で看護師や医師のために哲学カフェのような場を開いたのが始まり。現在では、一般の企業の研修でも哲学対話が試みられている。公務員や教員の研修にも有効であると期待される。

**哲学カウンセリング・哲学コンサルティング** 日本ではまだあまり実施されていないが、哲学対話を用いて個人や団体の問題解決を援助すること。二十世紀後半にドイツで始まり、ヨーロッパを中心に世界各地で哲学カウンセラー・哲学コンサルタントが活動しており、ビジネスとして成功している例もある。

**学校での哲学対話** これから少し詳しく紹介する。

## 学校での哲学対話

学校での哲学対話は、「子どもの哲学」という教育運動に連なる活動である。子どもの哲学は「子どものための哲学 (Philosophy for Children、愛称 P4C)」「子どもとともにする哲学 (Philosophy with Children)」「青少年のための哲学 (Philosophy for Youth)」「学校での哲学 (Philosophy in Schools)」など、さまざまな名称で呼ばれる。それぞれの呼称に推進する人の思い入れが反映されているが、哲学史・哲学理論の学習ではなく、哲

学的対話・思考の活動、つまり「哲学すること」であるという点では、一致している。以下では「子どもの哲学」という名称に統一する。

子どもの哲学は、一九六〇年代に、アメリカ合衆国の哲学研究者、マシュー・リップマン(Matthew Lipman 故人)によって構想された。リップマンはこの構想を実現するために、コロンビア大学からニュージャージーのモンクレア州立大学に移り、子どものための哲学推進研究所を設立、教育プログラムや教材を開発し、子どもの哲学の普及に努めた。基幹教材の『ハリー・ストートルマイアーの発見』は各国語に翻訳され、子どもの哲学は世界に広まっていった。ヨーロッパ各国、ラテン・アメリカ、オーストラリアなど中心に受容されたが、東アジアでも韓国やシンガポールで受容されている。各地で子どもの哲学の研究所や市民団体が設立され、それらをつなぐ国際組織「子どもとともにする哲学的探究国際会議(ICPIC)」もある。興味深いのは、子どもの哲学の教材開発や教員研修を業務とする企業が活動していることである。子どもの哲学は、リップマンの構想を受け継ぎながらも、地域ごとに独自の発展を見せ、現在では実に多様な形で実施されている。

この子どもの哲学の展開は、ユネスコの「パリ宣言」（一九九五年）とも軌を一にする。「パリ宣言」では、世界中のすべての人々が哲学を学ぶ権利をもち、哲学教育が行われているところではさらに伸張され、行われていないところでは「哲学」として企画されなければならない、と謳われている。すべての人々のなかには子どもたちも含まれるのである。

リップマンの基本的な考え方は、「探究の共同体(Community of Inquiry)」という理念によって包括的に表現される。これは、Ch. S. パースやジョン・デューイの思想を受け継ぐものである。探究の共同体では、ともに一つの問題について考え、言葉を使って探究していくことによって、自分たち自身で考えを深めていく技法と作法を身につけることが目指される。言い換えれば、推論や概念形成のための知的能力だけでなく、共同で探究を進めるための社会的能力を育てることが目指されるのである。その基軸になるのは対話の技法であり、それは以下のような要素から成り立つ。(人の話をよく聴く)〈わかりやすく話す〉〈他の人の言葉を自分の言葉で言い直す〉〈自分の発言の妥当性を吟味する〉〈異なる視点を認め、他の考えの可能性を探る〉などである。

## 子どもの哲学の実践例

私は、二〇〇〇年ごろに子どもの哲学に出会い、その可能性に期待を寄せ、少しずつ研究を進めていたが、実際に関わったのは高等学校での哲学対話ばかりだった。私の研究仲間のなかには、すでに二〇〇五年ごろから小学校で哲学対話を試み、経験を積んでいる人々もいたが、私自身は小学生と哲学対話をする自信をもてないでいた。思い切って小学校に赴いたのは、二〇一二年のことである。横浜市の小学校で、市の放課後児童育成事業のプログラムの一つとして、哲学対話を実施したのである。小学校三～四年生を対象に「きれいなもの」について考えた哲学対話はとても楽しく、忘れえぬものになった。こうして小学校デビューを果たした私は、それ以来横浜市の複数の小学校で哲学対話を行うようになり、二〇一四年度からは横浜市立幸ヶ谷小学校で、正規の授業時間中に哲学対話を行っている。

幸ヶ谷小学校は、ユネスコ・スクールに認定されており、「持続可能な発展のための教育(ESD)」を実施している。そのESDのプログラムの一環として、対話的コミュニケーションの能力を高めることを目標に、哲学対話を導入したのである。六年生の全クラス（二〇一四年度二クラス、二〇一五年度三クラス）に、四五分の授業を四回ずつ実施した。〃子どもの哲学の手法のうち、最も基本的な（「プレーン・パニラ」と呼ぶ人もいる）ものを用い、毎回一つの問いを決めてそれをめぐって対話した。クラスを三つのグループに分けると、一つのグループが十二、三人になる。それぞれに私や大学院生が進行役（ファシリテータ）として入り、子どもたちが自由に発言する形で進めた。

最初の時間に、導入として、フランスの幼稚園での哲学対話を記録したドキュメンタリー映画『ちいさな哲学者たち』の一場面を視聴し、哲学対話とは何をする事なのかを直観的に掴んでから、哲学対話とは何かを簡単に説明した。哲学対話は「みんなで話しあい、聴きあいながら、一つの問いをゆっくり・じっくり考えること」であり、その特徴は「大切だけどふだんは考えないことを考える、一つの答えが出ないことを考える、おとなも答えがわからないことを考える、みんなで考えるために話しあう、一人一人が考え、一人一人が主役である」ことにある。また、簡単な対話のルールと対話のコツを示した。対話のルールは〈人の悪口以外は、何でも自由に話そう〉〈他の人が話している間は那个人を見て最後まで聴こう〉〈他の人が話してくれたことに反応してあげよう〉である。対話のコツは、〈～ってどういうこと？〉〈なぜ？・どうして？〉〈たとえば？〉などの「意味」「理由」「例」に関する言葉を上手に使うことである。

考えた問いは、二〇一四年度の例で見れば、次のようなものである。「人の気持ちを知ることはできるか？」「友だちとは何か？」「生きるとは

「どういうことか?」「将来の夢はもたなければならないのか?」「自然と人間が共存する社会とは?」「幸せに生きるとは?」「なぜ勉強するのか?」最初の二つが、こちらからいくつか提示したもののなかから子どもたちが選んだもの、残りは、子どもたちから提案されたものもある。「将来の夢は…?」の問いは、この年度で出てきたなかでも出色の間であった。

私も大学院生たちも、ほぼ全回を通じて対話を楽しむことができた。もちろん、発言が少なく進行役が難儀する場面もあり、まったく興味を示さない子どももいる。しかし、多くの子どもたちは楽しそうに対話に参加し、対話後に書いてもらう「ふりかえりシート」にも好意的な記述が多い。私と大学院生の観察、ふりかえりシート、クラス担任の教員の観察を総合すれば、二〇一五年度、二〇一六年度の哲学対話を通して、次のように評価することができるだろう。

子どもたちは、哲学対話を楽しむことができ、一つのテーマを掘り下げて考えることができ、考えたことをうまく表現することができ、自分で問いを見つけることができる。また、普段の授業で子どもたちが見せるのとは異なる積極性・消極性が見られる。つまり、普段の授業で活発な子どもがおとなしくなったり、その逆だったりする。しかし、思考の積み上げはまだまだ不十分である。つまり、多様な発言をもとにして、協力して考えを創っていくところまでは、まだ到達していない。それには、もっと哲学対話の経験を積む必要があるように思われる。<sup>3)</sup>

## 哲学対話教育の意義

学校での哲学対話は、独立した哲学対話の授業として実施する他に、さまざまな科目と組み合わせて活用することができる。たとえば、公民科、道徳教育、各教科教育、ESD、大学の教養レベルの哲学の科目などである。先に紹介した幸ヶ谷小学校での哲学対話の授業は、ESDの授業の一環として実施されたが、対話的コミュニケーションの育成を目的としていたため、内容的にESDの授業の内容、たとえば環境問題とは必ずしも関連していなかったが、もっと授業内容に直結させることもできるだろう。道徳教育の内容と直結させることはイメージしやすいかもしれない。しかし、算数・数学、国語、理科、社会、家庭科、体育、音楽、図工、外国語どれをとってみても、哲学的な問いを問うことによって授業の内容を深めることができるように思われる。

たとえば、私の知り合いの中学・高校の教員は、地理の授業の導入で

「地域の環境の違いは、人々の考え方・感じ方に影響を与えるか？」という問いをめぐって哲学対話を行っている。各教科と哲学対話のわかりやすい実践例である。

さて、一般に哲学対話には次の三つの効用があると考えられる。(一) 道徳性の基礎、つまり、自他に対する尊敬、他の人々の立場に立つこと、非暴力的な問題解決、異質な人々との共存の技法と作法を養うこと。

(二) 市民性の基礎、つまり、民主的、共同的な意思決定、熟議の技法と作法を養うこと。(三) 学力の基礎を養うこと、つまり、自分で問いを立て、自分で考え、他の人々と共に考えることによって、答えを見出していく技法と作法を養うこと。

しかし、対話型教育の手法は他にもあるのに、なぜ「哲学」対話なのか。もちろん、哲学対話以外の手法でも、以上三つのことは養われるだろうが、哲学対話は特にそれに適していると考えられる。それは哲学対話の特色を考えれば明らかになる。

哲学対話の特色をいくつかあげてみよう。(あ) 哲学の方法は、自分で考え、他の人々と対話しながら考えることしかない。つまり、哲学的な問を考へるときは、自分で考え（自律的思考）、かつ他の人々ともに考える（共同的思考）ことを実行せざるをえない。(い) 当たり前とされていることを問い直す。これによって、自他の意見の前提や自己の生や社会の基盤を問い直し（批判的思考）、よりよいものへと修正していく（創造的思考）ことが促される。(う) 理由、根拠、前提を問う。これによって、異なる考え方に対する理解、文字通り理由、原理、理（ことわり、ロゴス）を理解することが促される。(え) 意味・価値・文脈を問う。これによって、事柄をより広い文脈および自分の生の文脈のなかに位置づけることが促される。(お) 重要だが簡単に答えの出ない問いを問う。これによって、答えの出ない問いを保持し続ける、いわば宙づり状態に耐える力が養われる。

以上の特色を別の角度から考えれば、次のように言うこともできるだろう。(か) 哲学的な問いは、学問、常識、専門家、おとななどの権威によっては答えられない問いである。それゆえ、それを前にする人びとの間に、比較的平等で自由な空間を開く。哲学的な問いを問う場では、専門家やおとなも一人の共同探究者になるのである。まさに「無知の知」の自覚によって成り立つソクラテス的状况である。(き) 哲学的な問いは、問われる事柄を自分自身の生に結びつけて考えることを促す。これは、教室内の知である学校知を生活世界の知である世間知に変えるために必要なことである。(く) 哲学的な問いは、紋切り型の言説ではなく、各自が自ら考え

て言葉を使うことを求める。それゆえ、紋切り型の言説が蔓延するところで失われる言葉に対する信頼を取り戻すことに寄与する。

さて、先述のユネスコの「パリ宣言」で重視されているのは、哲学が市民性（シティズンシップ）の涵養に寄与するという面である。哲学教育は、第一に、民主的社会の基礎である市民の判断力を鍛え、第二に、現代社会が直面する問題を各人が責任もって考えることを教え、プロパガンダに抵抗する思慮深い人間を育てる、というのである。私も、哲学対話のこの効用は、現代社会においてきわめて重要だと考える。その理由は三つある。

まず、民主社会における意思決定に必要なのは、たんに政治的なディベートや交渉だけではなく熟慮（deliberation）である。最終的には政治的決定を下さなければならないとしても、それに先立ってどのような熟慮がなされるかによって、政治的決定の質は変わってくる。熟慮の基本にあるのは、言葉を信頼し、対話を通じてさまざまな立場から考え、自分の考えを深めることである。そのための技法と作法を培うのにもっとも適しているのは、先にも述べたように、哲学対話である。また、現代社会が直面する問題の多くは、価値観の多様化、科学技術の発展、グローバル化によって生み出される、これまで人類が経験したことのない新たな問題である。どのような権威も明確な答えを出せない状況で、共同で粘り強く思考する力を哲学対話は養う。さらに、グローバル化した世界では、多様に異なる文化的背景をもつ人々が共生することが求められる。異なった文化的背景をもった人々が理解しあう技法と作法を養うことに、哲学対話は貢献しうる。

このように、哲学対話にはさまざまな効用がある。しかし、だからといって忘れてはいけないことがある。それは、哲学対話の楽しさ、喜びであり、哲学対話をすること自体の意味である。哲学的に考えること、対話を通じて考えることは、端的に楽しく、それ自体で意味がある。

リップマンと並んで子どもの哲学の発展をリードした哲学者、ギャレス・マシューズ（Gareth Matthews 故人）は、マサチューセッツ大学で哲学教授を務める傍ら子どもたちとの哲学対話を楽しみ、それをいくつかの著書に細やかに温かな筆致で描いているが、子どもたちとの哲学対話を楽しんでいる様子が生き生きと伝わってくる。<sup>94</sup>マシューズが来日して、日本の小学校で哲学対話の授業をしたときも、対話を心から楽しんでいるように見えた。マシューズは言う。子どもたちは真の哲学の問いを問うし、それをめぐって論理的に考えることができる、子どもを共に探求する仲間と認めるべきだ、と。

また、子どもと哲学対話を行った自身の経験に基づいて、子どもと哲学対話をすることの意義を説く教育学研究者の森田伸子は「哲学とは人間が

なぜか共有している〈意味〉の世界へとどこまでも近づこうとする営みそのもの」だと述べる。哲学対話は、自分や他人のあり方、生き方が関わらざるを得ない事柄について、世界の「意味」に身を浸しながらそれを問い、共に言葉を紡ぐことであり、それ自体において価値をもつ営みなのである。

## 哲学対話と哲学研究

最後に、哲学対話と専門的な哲学研究の関係に触れておきたい。哲学対話には「哲学は子どもには早すぎる」「素人に哲学なんかできるのか」などの疑問が呈されることがある。これは、哲学に関する一般的な誤解に基づいていると思う。「哲学は難解な術語によってしか表現できない」「哲学は高度に洗練された理論体系」といった誤解である。学術としての哲学には、たしかにそのような面があるが、それがすべてではないし、本来のあり方でもない。哲学の原初の姿は、素朴な問いから始まる対話である。ソクラテスの対話を思い起こしてみればよい。子どもであろうと、おとなであろうと、哲学的な問を問うことができるし、共に考えることができる。ただし、子どもだからこそ哲学的な問を問うという見方があるが、それは少々ロマンチックな期待だと言わざるを得ない。子どもも小学校の三、四年生ともなるとすでに常識や既成概念に絡めとられている。マシューズも、子どもが幼少期にもっていた哲学的な問を封印し忘却するのは、きわめて早い時期であると報告している。

このような哲学に関する誤解を指摘し正そうとした哲学の一人に、イマヌエル・カントがいる。カントは『純粹理性批判』において、人間が生きるうえでほんとうに大切な知（知恵）を、学術の専門家（「理性技術者」）に頼らず、一人の世界市民として探究する営みこそが哲学であるとし、それを「世界概念の哲学」「世界市民的意味での哲学」などと呼んだ。<sup>43</sup>その探究を真理へと導くのは、「自分で考えること」「他の人びととの対話によって、他のあらゆる人々の立場に立って考えること」「一貫性をもって考えること」の三つの心構えだと言う。現在広まりつつある哲学対話は、カントのいう「世界市民的意味での哲学」の、つまり本来の意味での哲学の、一つの具体例な形だと言えらるだろう。

### 注

(1) 二〇一六年度は三クラスに五回ずつ実施した。



## 哲学対話の可能性（寺田俊郎）

- (2)二〇一六年度の最終回（第五回）は対話そのものをテーマに対話を行った。その結果、子どもたちが対話の意味や方法を、驚くほど深く捉えていることがわかった。
- (3)『子どもは小さな哲学者』（鈴木晶訳）思索社、一九九六年、『哲学と子ども』（倉光修・梨木香歩訳）新曜社、一九九七年。
- (4)それに対して、哲学の専門家すなわち「理性技術者」が、専門的な目的だけのために研究する哲学は「学校概念の哲学」である。

### 参考文献

- 鷺田清一監修・カフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会、二〇一四年
- 河野哲也『〈こども哲学〉で対話力と思考力を育てる』河出ブックス、二〇一四年
- 森田伸子『子どもと哲学を一問いから希望へ』勁草書房、二〇一四年
- マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』紀伊国屋書店、一九九六年
- ギャレス・マシユーズ『子どもはちいさな哲学者』新思索社、一九九六年
- 同 『哲学と子ども』新曜社、一九九七年
- 寺田俊郎・石川求編著『世界市民の哲学』晃洋書房、二〇一二年
- カフェフィロ：<http://www.cafephilo.jp/>
- こども哲学・おとな哲学・アーダコーダ：<http://ardacoda.com/>
- 日本学術会議提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—考える「倫理」の実現に向けて—  
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t213-1.pdf>